高砂

大臣次第

いまを始乃旅衣日も行末そ
、、、ひさしき

早詞

抑是ハ九州肥後國
阿蘇乃宮乃神主ともなりとは
わかことなりわれいまた都を見す候
程に此度思ひ立都に乃ほり候
又よき次てなれは播州高砂乃
うらをも一見せはやと存候

書 17.10.-6 国会図

[謡本] 高砂 1冊 WA7- 054-002

国立国会図書館

旅衣末はる〴〵乃都路を〳〵
けふおもひたつ浦の波船路
のどけき春風のいくか来ぬらん
跡末もいさ白雲のはる〴〵と
さしも思ひし播磨のかた高砂乃
浦につきにけり〳〵　高砂乃
松乃春風吹くれて尾上の鐘も
ひゞくなり　浪はかすみの礒
がくれ　音こそ塩乃みちひなれ
誰をかもしる人にせん高砂乃
松も昔しの友ならで過こし
世々はしらゆき乃積り〳〵て
おひのつるのねぐらに残る有
明乃春の霜よおきゐにも

松風をのミ聞馴て心をともす
がむしろのおもひをのぶ
るばかりなり　音信は松にこと
とふ浦風の落葉衣の袖そへて
木陰のちりをかこふよ〳〵
ところは高砂のをのへの
まつも年ふりて老のなみも
よりくるやこの下陰のおち葉
かくまでいのちながらへて
猶いつまでかいきの松それも
ひさしき名所哉〳〵　里人を
相待ところに老人夫婦来れり
いかにこれなる老人に尋ぬへき
事の候　こなたの事にて候か

何事にて候ぞ　ワキ詞　高砂の松とハ
いづれの木を申候ぞ　シテ詞　たゞ今
木のかげをきよめ候こそ高砂乃
松にて候へ　ワキ　高砂すみの江の
松にあひおひの名あり当所と
住吉とは國をへだてたるに
何とて相生乃松とハ申候ぞ

シテ　おほせのごとく古今の序に
高砂住江の松も相生乃やうに
おぼえとありさりながら此尉ハ
あの津の国住吉の者是なる
うばこそ当所の人なれしる事あらば
まうさせたまへ　ワキ上カル　ふしぎや
見れば老人の夫婦一所にあり

なをしど我等は見えて高砂
浦山国を隔てゝ住といふは
いかなる事にて候　シテ上セル　うたての
仰せや山川万里をへだつれども
たがひに通ふ心づかひの
いもせの道は遠からず　シテ詞　まづ
あんじても御らんぜよ　二人上　高砂

住江の松も非情の物だにも
相生の名はあるぞかしましてや
生ある人として年久しくも
住吉よりかよひなれし尉と
うばは松もろともに此年まで
あひおひの夫婦となるものを
ワキ上カヽル　いはれを聞けば面白やさて

さきに申えし猶々相生の松の
物語を所にいひおくいはれは
なきか　シテ詞　むかしの人の申しゝは
是はめでたき世のためしなり
ツレ上カカル　高砂といふは上代の万葉集の
いにしへの義　シテ詞　住吉と申は
此御代に住給ふ延喜の御事
ツレ　松とはつきぬことの葉の
シテ詞　さかへは古今あひおなじと
二人上　御代をあがむるたとへなり
ワキ上カカル　よく〳〵きけばありがたや今こそ
不審春の日の　シテ上カカル　光やはらぐ
西の海の　ワキ　かしこは住の江
シテ　爰は高砂　ワキ　松も色そひ　シテ　春も

ワキ〽長閑なり

上哥同〽四海波志づかにて
國もおさまるときつ風枝を
ならさぬ御代なれやあひに
相生松こそめでたかりけれ
げにやあふぎてもこともおろかや
かゝる世にすめる民とて豊
なる君の恵ぞありがたき

ワキ詞〽なを〳〵高砂のまつのいはれ
御物語候へ　シテ詞〽くはしく語て
きかせ申候べし　クリ同〽夫草木
心なしとは申せども花実の時を
たがへず陽春の徳をそなへて
南枝花始てひらく　〽志かれ共
此松はけしきとこしなへに

して華葉時をわかず四つの時
至りても一千年の色雪の中に
ふかく又は松花の色十かへりと
もいへり　かゝるたよりを
まつがえの言の葉草の露の
玉心をみがく種となりて
生きとし生けるものごとに敷島の

かげによるとかや　しかるに
長能が言葉にも有情非情の
其声皆哥にもるゝ事なし
草木土沙風声水音まで万物の
こもる心あり春の林の東風に
うごき秋の虫の北露に鳴くも
皆和哥の姿ならずやなかにも

［謡本］高砂　1冊　WA7-　054-009
国立国会図書館

此松ハ万木に勝れて十八公の
よそほひ千秋の緑をなして
古今の色を見ず始皇乃御爵に
あづかる程の木なりとて異國
にも本朝にも万民是を賞翫す
高砂乃尾上の鐘の音すなり
暁かけて霜ハおけども松枝乃
葉色ハおなじ深みどり立よる
かげの朝夕にかけども落葉乃
つきせぬハ誠なり松の葉の
ちりうせずして色ハなほ正木の
かづら長き世のたとへなりける
ときハ木乃中にも名ハ
たかさごの末代のためしにも

相生の松ぞめでたき　実に名を
得たる松枝乃〳〵老木乃昔
顕してその名を名のり給へや
いまは何をかつゝむべき是は
高砂住の江の相生のまつ乃
精夫婦と現じ来たりたり
ふしぎやさては名所の松の
きとくを現して　草木こゝろ
なけれども　かしこき代とて
土も木も　我大君の国なれば
いつまでもきみがよに住吉に
先行てあれにて待申さんと
夕浪の汀なる海士乃小舟に
うちのりて追風にまかせつゝ

[謡本]　高砂　1冊　WA7-　054-011

国立国会図書館

沖つみなとに出よくわやく
高砂や此浦舟に帆を揚てゝく
月もろともにいでしほの波の
淡路の嶋かげや遠くなる尾の
おきすぎてはや住江に着けり
くわく影見えてもいさしく
かわぬ住吉の岸の姫松いく世
経ぬらむ濤下し昭笑見えを
しらはや三津の乗浜びきしよ
代ゝみちみるくゞよ高乃鼓若
拍子揃ふ浪へてゞしく志絶姫
宮川こたち西乃海あをきか
りゝ乃形見乃下よわあゝり積
本ー緑松みどり長なる秋や磯の雪乃

あさかゝた玉もかるなる岸
陰の松根によりてこしを
すれは千年乃緑手にみてり
梅花を折てかうへにさせは
二月の雪衣におつありかたの
影向や〳〵つきすみよし乃神
あそひ御影を拝むあらたさよ

げにさま〳〵乃舞姫の声も
すむなりすみ乃江の松かけも
うつるなる青海波とはこれやらん
神と君との道すくに都の春に
ゆくへくはそれそ還城楽
まひさて万歳の小忌衣
さすかひなには悪魔をはらひ

[謡本] 高砂 1冊 WA7- 054-013

国立国会図書館

をさむる手には寿福をいだき

千秋楽は民をなで万歳楽には

命をのぶ相生の松風颯々の

声ぞたのしむ〳〵

国立国会図書館

[謡本] 高砂 1冊 WA7-054-014

国立国会図書館